

〔注意〕

答えはすべて、解答用紙の定められたところに記入しなさい。
本文には、問題作成のため、省路や表記を変えたところがあります。

□ 主人公の西田イコは、東京から少し離れた松田村に疎開しました。そして、東京に残った父のセイソウや父方の祖母のタカと別れ、実母の死後に継母となった光子、異母弟のヒロシと三人で暮らしはじめます。次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

一年とちよつと前、アツツ島という北の方の小さな島で、日本は初めて戦いに負けたと発表された。今まで、負けたことがなかったから、みんな驚いた。日本が負けるなんて、そんなこと起こるわけがない。すぐに取り返す、大人たちはみんなそう思っていた。でもなんでもないと強がりと言いながらも、ここにきてみんなの気持ちも少しづつ変わってきたように見える。

村の人が食べ物を売ってくれなくなったのだ。政府からの供出も厳しくなつたうえに戦争が長引くのではないかと心配して、自分の家の蓄えに回してしまふ。

「ない、ないって言いながら、しまいこんでるのよ。この頃、お金じゃ売ってくれないの。セイソウさんは、自分の洋服や着物で換えてもらつたらいいと言うけど、男の人の着物はほしがらないの」

光子さんはお米が少なくなつた米櫃を覗くたびに不安そうに言った。そして算筒の引き出しをあけて、あれこれひっくり返し、自分の着物を一枚引つ張り出すと、座り込んで、膝の上にさつと広げた。きれいな着物がごつごつしたむしろのうえに広がつた。

① 「きれい」と思わず言いかけて、口を押さえた。光子さんはゆっくりめの調子で、着物をさすりながらつぶやく。「これね、おかあさんがね、なくなるちよつと前に、上野のデパートで、私に譲ってくれたのよ。京都の友禰、この薄紅色きれいでしょ。模様はおめでた尽くし。お正月の初もうでに、浅草の浅草寺に着ていったの。懐かしいわ。いい時代だった。ちよつと前のことなのにな」

懐かしさたつぶり、未練たつぶりだ。② 私は半分横を向きながら聞いていた。そうですか、よかったですね、優しいおかあさんがいて。

「しようがないわ。思い切つてお米に換えましょう。急いで行つてくるわね。何軒もまわらないといけないかもしれないから、イコちゃん、ヒロシをおんぶして待つてくれる」

「うん、いいよ」

私は答えた。私の食べる分も、この光子さんの着物に入っていると思うと、気が重い。私はこのおんぶが大嫌い。ヒロシはもうとつとと歩けるのに、光子さんは出掛けるときは必ず私におんぶをたのむ。怪我でもしたら大変と思つているのだ。

「ヒロシ、イコちゃんとお留守番、お願いね」
光子さんは私の背中に、ヒロシを括りつけようとする。私はあわててチエコさんをまえに抱え込んだ。

③ 「あら、またなの、イコちゃん」
光子さんは苦笑いをした。いつも私にはイコちゃんと「ちゃん」をつける。ヒロシは呼び捨てなのに。遠慮してるんだ。

背中がもわつと温かくなる。ヒロシはおんぶされると、いつもすぐ寝てしまう。動かなくて、楽だけど、なぜかすごく重くなる。抱えたチエコさんが私の方を見上げてる。私は両手でぎゅつと抱きしめた。タカさんの家のお練番の匂いが、ふつとのぼつてきた。

私はトンネルの方へよろよろと歩いていった。トンネルの中はいつものように暗い。まわりに吹いている風が、ひゅー

平 2 8
中
国
—
2
—
6

つと中に吸い込まれていく。誰かが中から引つ張っているみたい。私はきをつけをした。だれもないから思い切って大きな声を出した。

「わたしは松田村国民学校 四年二組西田イコです。ここに疎開しています。今日もこれからお歌を歌います」
「ももたろうさん」

歌いかけて、自分でも変なことをしているような気がした。この間は鼻歌みただったけど、^④今日は声を張り上げている。でもかまわず続けた。

「ももたろうさん ももたろうさん

おこしにつけた きびだんごー

ひとつ わたしにくださいな」

小さい時、タカさんのお茶の間で踏み台に乗って歌ったときのことを思い出した。あの時のように、タカさんの拍手はないけど、声は森の中に流れ込んでいった。不安や、心配を、森が少し吸い取ってくれてるような感じがする。

恐くていやな森なのに。いつも、「イコが通ります」っておまじない言ってるのが良かったのかもしれない。私がいかにいるって、知ってもらえたのかもしれない。気持ちが少し元気になってきた。

(角野 栄子『トンネルの森 1945』による)

(注) 供出……政府などの要請によって物資をさし出すこと。

チエコさん……タカが手ぬぐいを縫って作ってくれた人形の名前。

トンネル……イコの家近くにある、周りの木々がしげってトンネルのようになった道。

国民学校……現在の小学校にあたる。

問一 ———— ①『きれい』と思わず言いかけて、口を押さえた」のはなぜですか。

問二 ———— ②「私は半分横を向きながら聞いていた」とありますが、このときの「私」の気持ちを答えなさい。

問三 ———— ③「光子さんは苦笑いをした」とありますが、このときの「光子さん」の気持ちを答えなさい。

問四 ———— ④「今日は声を張り上げている」のはなぜですか。

□ 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

この文章を僕が書いてある今日の日付は、二〇一三年八月一日です。来年再び八月一日はやってきますが、それは二〇一四年の八月一日であって、まったく同じ日ではない。この二〇一三年の八月一日という今日は今日死ぬのです。

これもまた一つの死です。小さな死。小さな不条理。

死とは、いつか訪れる呼吸の止まる時、心臓が停止して、死体になる時だけではありません。死は日々、一瞬一瞬、やってきている。生まれてきた瞬間から、常に死に向かってものすごい速度で近づいていて、小さな死は日々、一瞬一瞬、訪れている。今日というこの日は、今日死ぬのです。

この八月一日は今日しかなく、永遠にやってこない。

明日になったら別の日。八月二日には、八月一日は死んでしまったんです。だけど誰かが①「小さな死」を見送って生きています。最後の最後に「物理的にやってくる」死体になる瞬間以外でも、常に、死を刻んでいることが、僕には最も恐ろしい事に思えるのです。

最後に完全に死体になる瞬間も、貴重な一瞬ですが何気なく通り過ぎていく今日という永遠にやってこない一日の刹那もまたとても貴重だし、考えれば考えるほど……恐ろしくも切ない。こうやって人は日々、死を重ねて、生きていく。それが年齢となるのです。五歳の人は、一年を五回死んで五歳になったんです。

僕は今年五十一歳なので、夏が五十一回も死んだ。一年が五十一回過ぎて死んで五十一歳になった。

春夏秋冬が毎年やってきて、今日は今年の夏が死んでゆく。毎年死んでいった夏が、また今年新しくやってきて、五十一回目の真新しい夏が、やがて去年のように再び死んでいきます。こうして、人は年をとっていき、最後に本当に死にます。寺山修司という詩人にこんな詩があります。

「昭和十年十二月十日に

ぼくは不完全な死体として生まれ

何十年かかかって

完全な死体となるのである」

人間という考える生きものが生まれてきてこのかた、無数の人々が死にうろたえ、死をおそれたことでしょう。そして死を哲学し、宗教をつくり、あの世を考え、天国と地獄について考え、あの手この手をつかって、死という不条理に対して、何とか着地点を見つけようとしてきた。

でも、②死は、いつだって僕たちをふりだしに戻してきた。

だって、死んだ後のことは誰も知らないから、死について大部分が推測にすぎないまま終わってしまうんだ。死はたしかに恐ろしい。毎年、季節が巡り、死んでゆくのも切ない。泡のように消えていく日々も、空しい。それでも、もっとも恐ろしいのは考えることをやめる、という死であると僕は思います。自殺はよくない、とみんなは言いますが、考えることをやめること、生きたいように生きる事をあきらめる事、放棄する事もまた「小さい自殺」。

③「小さな自殺」の積み重ねは、物理的に自殺することへと少しずつ移動していきます。

詩人の寺山修司の「完全なる死体」になるためにも、不完全な死体の日々、生きる事をあきらめずに、妥協せずに、ゆっくりと歩いていこうと僕はいつも思っている。

「何の目的で生きているんだ？」

友人の息子さんは、他の動物に食べられてしまった生まれたて三か月の動物の赤ちゃんについて考えて悩みました。

「目的は食べられること？ そんなの目的？」

死ぬのはいつも他人ばかり

マルセル・デュシャン（芸術家）

マルセル・デュシャンという芸術家の放った一言は、大変興味深いと思います。

いくら考えても、**1** や見知らぬ動物の赤ちゃんの生の目的がわかるわけがないのです。一年前、突然、自殺してしまった僕の知人も、何の理由で死んだかはつきりませんでした。「死ぬのはいつも他人ばかり」であって、彼らは何を思っていたかもわかりません。だって **2** だから。「生きている喜び」を生前感じていたか、「生きていてよかったなあ」と実感したかは、**3** にしかわからない。**4** にわかりっこない。

「僕や君が、どう考えても 動物の赤ちゃんが、何をどう感じてたかわかりっこないんだよ」と僕は友人の息子に言いました。

「死ぬのはいつも他人ばかりだから、他人の死についてああだ、こうだ、考えても、結局、堂々巡りだ。それよりも今日、君がどう生きたかを考えたらどうだろう。今日という二度と来ない一日を、どう生きたか、そして君は今日、どう死んでゆくのか」

「僕は今日、もうじき死ぬの？」

「そうだよ、君は毎日死ぬ。今日という日も死ぬ。君がいよいよといまいとおかまいなしに今日は終わる。そして今日生きた君は、明日にはいない。二〇一三年八月一日に生きた君は、今、午後十時だから、あと二時間で死ぬんだ。だから問題は死にざまじゃなく、今だ 今、どう生きているかだ。それも長さじゃない。さっきテレビで見た動物の赤ちゃんだって三か月生きたあと食われた。その三か月をどう過ごしたか。百年生きるのも三か月も、生きた事にかわりはない。日々、どう生きたかだけが問題なんだ。『輝ける生』を生きるかどうが」

「ならばあの赤ちゃんも、もしかしたら『輝ける生』を生きたかもしれないということ？」

「まさしくその通り、だから誰もが平等に、死を持っているのだよ」

「不完全な死体として生まれた」僕たちは何十年かかって「完全な死体となる」と、寺山修司は書きました。すべての死には、必ず何か意味があると僕は思うのです。つまり、すべての生に、何か人間には到底理解できない「秘密」があつて、**④** 完全な死体になった時、「秘密」は熟すんだと思います。

（園 子温「死を刻む」による）

（注）

刹那……きわめて短い時間。

億測……自分でかかってにおしはかること。

放棄……投げ捨ててかえりみないこと。

平 2 8
中
国
—
5
—
6

問一 ——— ①『小さな死』とはどのようなものですか。

問二 ——— ②「死は、いつだって僕たちをふりだしに戻してきた」とはどういうことですか。次のア～エからもっともふさわしいものを一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 人間の死の訪れは日々、一瞬一瞬のできごとなので、終わったと思っても次の瞬間にはまた始まっている。
- イ 人間は死の恐ろしさを克服するための様々な解決のしかたを考えたが、どれもうまくいかなかった。
- ウ 人間の死の目的を他人が理解するのは難しく、理解したと思ってもそれが不十分だとすぐわかってしまう。
- エ 人間は死の訪れに影響をあたえることができないので、自分の生き方だけを真剣に考えるべきだ。

問三 ——— ③『小さな自殺』とはどのようなものですか。

問四 ① ④ にあてはまるもっともふさわしい語を次のア～ウからそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。

同じ記号を何度用いてもかまいません。

- ア 知人 イ 他人 ウ 本人

問五 ——— ④「完全な死体になった時、『秘密』は熟す」とは、どういうことですか。

問三 カタカナは漢字に直し、全体をていねいに大きく一行で書きなさい。

リヨウヤクはクチにニガシ。

平 28 中
国 — 6 — 6

④ 次の詩を読んで、あとの問いに答えなさい。

秋の砂

木坂 涼

そんなに

いいことはないよと

海に

言ってみる

海が

波のさきを

砂浜にひっかけ

ひっかけ

陸へ

あがりたそうにしているから

わたしは

足あとを

波のさきのにこした

ひんやり濡った

秋の砂に

海に嫌味を言ったあとの

苦笑で

すこし軽くなった足あとを

問一 「そんなに／いいことはないよ」と言ったときの「わたし」の気持ちを答えなさい。

問二 「足あとを／波のさきのにこした」のはなぜですか。

平 2 8
—
中
国

解 答 用 紙

受 験 番 号
氏 名

評 点

問 四	問 三	問 二	問 一

問 五	問 四	問 三	問 二	問 一
	1			
	2			
	3			
	4			

--

問 二	問 一